

教育カウンセラー あきた

第28号

2020年（令和2年）12月12日発行

はじめての巻頭言

— 会員相互の交流による教育カウンセリング活動の充実を目指して —

代表 荻間澤 勇人
(会津大学 文化研究センター
センター長 教授)

ご縁があり、2019年度から秋田県教育カウンセラー協会の支部長を務めております。秋田支部創設の際、岩手支部の理事としてお祝いに伺いました。それ以来、秋田支部の皆様と交流が続いています。今回、支部長として初めて巻頭言を述べさせていただきます。

日本教育カウンセラー協会の兄弟団体である「日本教育カウンセリング学会」の研究発表大会が11月22日（土）、23日（日）に秋田市で予定されていましたが、2021年に延期になりました。新型コロナウイルス感染拡大防止のためとは言え、とても残念に思っております。運営にご協力いただき予定でした支部会員の皆様には御理解いただきたいと思ひますし、来年、2021年の開催の際には絶大なご協力を賜りたいと願っております。

さて、日本教育カウンセラー協会（JECA）の会長であった國分康孝先生は、「教育カウンセラーにはリサーチの素養が必要である」と話されました。それはリサーチ力と教育カウンセリング活動の間に高い相関があると考えていらっしゃるからです。確かに、どちらも物事を注意深く観察することから始まる点が共通しています。そして、教育カウンセラーのリサーチ力を高めることを目標にした組織が「日本教育カウンセリング学会（JSEC）」です。JSECはJECA内の研究部門を発展独立させた学会組織です。JSECの目標達成のための施策の一つが「研究発表大会」です。兄弟団体と述べたように、JECA会員も研究発表大会に参加申し込みが可能です。

ところで、JECAとJSECは兄弟組織ですが、それぞれが独自に運営されています。現在のJECAの会長は学習心理学がご専門の河野義章先生、JSECの理事長はカウンセリング心理学がご専門の河村茂雄先生です。JECA会員の中には、同じ組織と認識している方もいらっしゃるようですが、別の組織であることをご理解ください。JSECの

学会員には、「日本教育カウンセリング研究」という学会誌が年に1冊届きます（2020年度は2冊）。学会誌が届いていない方はJSECには入会されていません。

JECA会員の中には、学会やリサーチと聞いて敷居が高いと思われた方がいらっしゃると思います。私も高校教員だった頃、そういう気持ちがありました。JECAとJSECの運営に関わってわかったことは、研究発表大会は教育カウンセリング活動を交流する場であり、教育カウンセラーが力量を高める場であるということです。研究発表大会に参加される方々は、そういう場で自身の教育活動を高めていこうと考えていらっしゃると思います。教育カウンセリング活動をまとめる作業は「ふりかえり」となり、よかった点や改善点が明確になりますし、交流することで他者の視点を取り入れることができます。そして、次の活動をより良いものに改善していくのです。また、「教育カウンセリング college」も教育活動を交流する身近な催しです。秋田では2020年2月に開催されました。発表者6名、参加者40名でした。そのときの発表内容をニューズレターで紹介しています。私は秋田支部でミニ college を継続していきたいと考えています。JECAとJSECが得意な領域は、構成的グループエンカウンター（SGE）やQUによるアセスメントです。例えば、秋田市ではQUが広く利用されており、QUを有効に活用している教育活動があると思います。その活動をまとめて交流することで他者の役に立つのです。ぜひ、ご自身の教育活動を研究発表大会やミニ college で発表していただきたいと思ひます。秋田支部の皆様に期待しております。

今後は、SGEとQUに続く教育カウンセラーが身につけるスキルとして山形支部が推進する「解決志向ホワイトボード教育相談」を、私は推奨します。「チーム学校」と言われ、援助のあり方が教師の個による対応から、チームによる対応へと変化しています。チームをまとめるミーティングのスキルとして「解決志向ホワイトボード教育相談」が有効です。秋田支部の皆様にご紹介する機会を設けたいと考えています。

会員相互の交流を通して教育カウンセリング活動を充実させていきましょう！

アメリカジョージア大学・在外研究滞在記

秋田大学准教授 瀬尾 知子

「いつか、海外との比較研究をしたい」と考えたのは、『Preschool in Three Cultures: Japan, China, and the United States』の著書と出会った時からでした。そして、「比較研究をするならば、この本の著者であるジョージア大学の Joseph J. Tobin 教授から直接ご指導を仰ぎたい」と漠然と考えていました。このことを、私の大学院時代の恩師である榊原洋一先生（現お茶の水女子大学名誉教授）に相談をした際、偶然にも Tobin 教授と榊原先生が知り合いであることを知りました。

秋田大学では、平成 20 年度から「秋田大学研究者海外派遣事業」を実施しており、私は幸運にも、大学、学部の先生方、職員の皆さまと恩師に多大なるご支援をいただき、2019 年 9 月から 2020 年 3 月までの半年間、アメリカのジョージア大学で在外研究をする機会をいただきました。

私は、ジョージア大学教育学部に Visiting Scholar として滞在し、プライベートと研究の両面で多くの貴重な体験をしました。J1 ビザ取得、英語能力テスト、アパート探しからアパート暮らし、英語での研究倫理申請、研究承諾、観察調査、インタビュー調査等々、充実した生活を送りましたが、多くの苦労がありました。しかし、「自信がついてから海外に行って研究をしよう、勉強をしようと考えていたら、一生海外に行くことはできないので、とにかくチャレンジをしよう」と決意をして、海外派遣事業に応募したことは間違っていなかったと思っています。

ジョージア大学は、アメリカの南部を代表するジョージア州にあります。ジョージア大学は、州都のアトランタから東に約 100 km、車で約 1 時間 30 分のアセンズ市に立地しており、全米で古い歴史をもつ州立大学の 1 つとなっています。ジョージア大学は、研究大学として知られ、多くの研究者が海外から集まり、世界中の人々と繋がって研究を進める環境がありました。大学のキャンパス内に、フットボール競技場やホテル、コンサートホールがありました。またスターバックスや色々な料理が楽しめるフードコートがいくつもあり、いたるところにソファが置かれており、学生は自由に座ったり、寝転んだりしながら勉強に勤しんでいました。大学では先生方とファーストネームで呼び合ったり、お菓子をつまみながら授業に参加したりと、日本とはずいぶん勝手が違い、多くの戸惑いがありましたが、とても新鮮なものでした。その一方で、幼稚園では、「Miss〇〇」や「Teacher 〇〇」と子どもたちが先生に対してとても丁寧な言葉遣いをしており、おやつや活動の時間はしっかりと時間で区切られていることがとても印象的でした。そして、アメリカでは、人を対象とした研究は倫理面で徹底されていました。私は「幼児期の食育と社会情動的スキルの発達 - 日本とアメリカの子どもの食事場面の比較研究 - 」というテーマで研究を行いました。この研究を行うためには、アメリカの幼稚園で幼児の食事場面のビデオ撮影と保育者へのインタビュー調査を行うことが必要であり、研究許可を得るまでに多くのプロセスがありました。気が遠くなってしまいそうなほど、色々な申請書を作成したり、研究依頼のためにジョージア大学附属 McPhaul Center の園長先生にお会いし、汗だくになりながら、研究の必要性や研究計画の説明をしたりしたことも、今となってはとても良い経験となっています。

ジョージア大学での在外研究を通して、Joseph J. Tobin 教授はじめ、幼児教育を専門とする教員の方々や院生の方々と、研究に関して議論をしあったり、苦楽をともにしたりすることで、海外の学会で出会っただけでは得られない、かけがえのない人とのつながりをもつことができました。いろいろな人に支えられ、充実した研究生活を過ごせたことに感謝し、今度は、私が多めの人のために自分の出来ることをしていきたいと思っています。



ポジティブな発言に感動

秋田市立山王中学校

教諭 佐藤 健吉

コロナ禍は私たちの考えを変えました。今年度の研究計画は「人を集めることをしない」を基本方針として計画を練り直しました。例えば、グループ学習はしない。言語を発する対話的な場面は本当に必然性がある場合以外は設定しない（当たり前前のことです）。など、今まで行われてきたものを見直す機会ととらえることができました。おかげで、「これ本当に必要？」と考える習慣が身に付きました。

生徒へは（赤十字の HP 新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！～負のスパイラルを断ち切るために～）を掲示したり、校長通信が発行されたりして生徒への正しい理解を促し、ことある毎に誹謗中傷は許されないことであることを周知しました。生徒の間ではトラブルはなかったのですが、大人たちの間では誹謗中傷があったと聞いています。

学校が再開したとき、ある生徒がこう言いました。「学べることって、当たり前だと思っていたけれど、実はとってもありがたいことなんですね。学べる機会があることに感謝したいです。」逆境をプラスに転換する生徒のポジティブな言葉に感動しました。このような言葉に出会うことができ、私たち大人も感謝したいと思います。



出会いに感謝して・・・

元 横手市立栄小学校

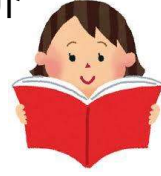
教諭 菅 昭子

この3月、36年間の教職生活に何の未練も無く別れを告げ、家事と土にまみれる日々を過ごしています。元々高い志をもたずに教職に就いてしまったものですから、私の能力では処理しきれない多くの出来事に出遭いました。それでも定年までこの仕事を続けられたのは、多くの方々の支えがあったからだとしみじみ感じています。家族は勿論、各校での同僚、そしてカウンセラー協会でお会いしたみなさん、たくさんのお力添えをいただけたからこそこの「今」があると思います。特にカウンセリング講座との出会いは、当時（2004年だったと思う…）様々な子どもたちの出現にどう対処してよいか悩んでいた私に心のしなやかさを与えてくれ、また、それが最後まで仕事を続けられる原動力となりました。

講座で学んだSGE、授業や学校生活の中で実践したことが、すぐには効果を感じられなくても続けていくうちに子どもの心が緩んでくる、そういった感覚を何度も味わう事が出来ました。小学校高学年を担任することが多かったのですが、最高学年となったとき、自分の良さを感じて行動できるようになってほしいとやっていたことが、毎日の「ミニいいところ探し」と行事の度の「私の四面鏡」。子どもたちの他を見る目は決して的確なわけではないのですが、「当たらずといえども遠からず・・・」続けることでそれぞれ自分に自信がついてくるようでした。6年生を送る会や卒業式で下学年の感謝の言葉を前向きに受取り、最高の笑顔を見せる子どもたちを本当にうれしく思いました。

いい瞬間、素敵な場面に何度も立ち会えたこと、温かく支えてくれる仲間に出会えたことを感謝しています。今後は予定のないスケジュール表が広がっていますが、まずは「晴耕雨読」+ちよっと家事・・・で心のエネルギーをしっかりと養っていきたいと思っています。

オンライン公開講演会に関わるご著書等の紹介



河村茂雄先生（早稲田大学教育・総合科学学術院 教授）

育てるカウンセリング実践シリーズ Ⅰ

「学級崩壊 予防・回復マニュアル ～全体計画から1時間の進め方まで～」

心理学と社会学を背景に、学級回復のたしかな手順がまとめられています。学級のタイプと実態を診断し、反抗型初期・なれ合い型初期の各回復のシナリオ、中期・回復のシナリオとそれぞれに応じた回復マニュアルを網羅。また、イラスト入りで雰囲気を和らげるゲームの進め方や、学級生活の振り返り方も紹介されています。

（「図書文化」HPより）

藤村一夫先生（岩手県盛岡市立太田東小学校 校長 上級カウンセラー）

「育てるカウンセリングによる教室課題対応全書2

学級クライシス 担任が主となる対応④ 再契約法」

学級クライシスとは、集団が教育機能を失っている状態であり、教師の指示に従わない他人を傷つける・ルールを破るなどマイナスの規範で回転している状態です。これは緊急事態であり、通常とは違う対応を要します。まず学習権を保障することから始め、学級集団を立て直すまでの原理と進め方が子細に網羅されています。

（「図書文化」HPより）

荻間澤勇人先生（会津大学 文化研究センター、センター長 教授）

「学級集団に対するいじめ解消を目指した援助事例—再契約法により介入を中心にして」

学級経営心理学研究, 1, 59-69

秋田県教育カウンセラー協会会長でもある荻間澤先生。9月27日のオンライン公開講演会では「学級担任が行ういじめ防止対策と心のケアのあり方」についてご講義いただきました。その中で再契約法が話題となりました。先生の学級立て直しへの大きな手立ての一つである再契約法やその実践が詳細に掲載されています。

★今回は事務局おすすめの著書・文献を紹介しました。

編・集・後・記

ウイズコロナの時代になってしまいました。4月から始まるはずの学校は始まってすぐに休校になりました。学校が再開してからもグループ活動などは全く考えられない状態でした。しかし、最近はコロナとの付き合い方がだんだんわかってきて、距離をとり、マスクをしてのグループ活動などができるようになってきました。人との関わりはどんなことがあっても存在します。

さて、コロナ渦の中、誹謗中傷で傷つく子どもや傷つける子どもがいます。コロナに罹患した人は被害者でしかないはずなのに…。私たちは自分たちができることを精一杯行い、人と関わることの素敵さを伝えましょう。そして、いわれのない誹謗中傷に苦しむ子どもが一人でも少なくなるように今後も努力していきましょう。（N・Y）